

「あいだ」からみた母子関係

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター

本論文では、訪問助産師の立場から、実地調査をとおして、現代の母子関係について考察し、さらに木村敏氏の「あいだ」論に依拠しながら、母子関係の病理および、母子関係における超越性について考察をおこなった。

筆者が訪問助産師の活動をとおして見てきたのは、今日、母親たちが子育てを容易におこなえないという現状である。昔の社会では、子どもは多くの家族に見守られながら育っていったが、核家族化、対人関係の希薄化などによって、出産や子育ては自然におこなうことが難しい状況になっている。育児力の低下には、親たちが子育ての現場に遭遇しないということのみならず、過去の生活力とでも言うべき体験の不足が大きく影響していると思われる。このような現状に対して、社会の支援体制は必ずしも充実しているとはいえない。そのため、親子関係、とくに母子関係をとおして、子どもの人格形成に問題を及ぼすような問題が生じていると考えられる。

本論文では、まず第1章で、日本における出産や子育ての現状について考察をした。そのなかで、とくに日本における出産をめぐる歴史的な推移、今日の社会的背景、そして助産師の活動について述べた。

第2章では、現代の母子関係の形成をめぐる、実際に筆者がおこなった調査をもとに考察をおこなった。とくに焦点をあてたのは、早期母子関係形成期（新生児訪問）における助産師の現場でのかかわり方についてあるが、それを、新生児訪問を担当する助産師へのアンケート調査、ならびに4カ月健診に来所した母親への聞き取り調査から明らかにした。それによって、現代の母親像と、母親がいただく助産師の活動についてのイメージが明らかになり、母親支援についての具体的な提案を試みた。

第3章では、以上をふまえ、木村敏氏が提起している「あいだ」論という、日本の精神病理論をふまえて、母子の陥りやすい関係性の問題を考察した。まず「あいだ」についての概念規定をし、母子関係の「あいだ」においても、過度の密着や過度の分離というような「あいだ」の病理が生じやすいこと、さらには、ダブル・バインドやアレクシシミアのような「あいだ」にかかわる病理があるということを指摘した。本考察で強調したのは、木村氏の「あいだ」論が母子関係の問題解明や、母子支援においても有効であるという点である。

「あいだ」論との関連で強調したもうひとつ別の点は、この「あいだ」論のなかに、超越という宗教性にかかわる意味がふくまれているということである。木村氏によってそれは「絶対の他」としての「あいだ」という観点でとらえられている。これに関連して重要なのは、母子関係を見ていくときにも、こうした宗教性とも呼べるような視点が不可欠なのではないかという点である。「絶対の他」が母子関係の当初から働いていることを知ること、母子関係にはすでに宗教的な次元が存在していることが見て取れる。日本では絶対

的な神が存在しているわけではなく、そのため、日本人の宗教性はつねに曖昧で、宗教的意識が希薄になりやすいのだが、母子の最初の出会いや最初期の交わりのなかに、すでに「超越」の契機がふくまれていると考えられる。今日、母子関係をめぐる議論は、生物学的、心理学的、社会学的なものに終始している観があるが、本論文では、それに宗教的な超越にかかわる議論をふくめるべきではないかという点を強調しておいた。このことは助産師の活動にとっても重要な視点であると思われる。